



川系男子の『川と人』めぐり No.2 ~和泉川~

坂本貴啓（筑波大学大学院博士前期課程生命環境科学研究科 白川直樹研究室『川と人』ゼミ）

『川と人』 めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きでしようがない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介します。

1. 五月晴れの川めぐり日和

新緑の若々しい緑が芽吹く頃、神奈川県和泉川を訪ねた。よく、多自然川づくりに関する書籍などで目にする川で前から気になっていた。

研究室の後輩2人と共に見学会の待ち合わせ場所の相模線の三ツ境駅へ。30分近く早くついたが駅の改札を出て広場にはもう待っている人がいた。今日の和泉川見学会の主催者の吉村伸一さんだ。吉村さんは元横浜市の土木担当の職員で当時の横浜の河川事業に携わっていた。27年間職員の仕事をし、50歳になった時に退職。退職後は（株）吉村伸一流域計画室を立ち上げ日本各地の河川再生事業に尽力されている日本の河川再生のプロの一人だ。今日はそんな吉村さんが当時河川再生を手がけた和泉川を『善福寺川を里川に返す会（通称：善福蛙の会）』の人達と共に見学する。

和泉川は境川の支流で横浜市管理する二級河川である（図1）。流路延長は9.42km、流域面積11.5km²で源流を瀬谷市民の森に発し、瀬谷区、泉区を流れ境川に合流する。和泉川周辺は相模原台地が広がっており、その谷地に沿って和泉川が流れる地形構造になっている。そのため台地から川までは斜面林が広がっており、河畔林が張り出している場所が多い。

集合場所で待っていると大学の先生、学生、行政、市民団体、コンサルなど40人以上の人らが集まってきた。5月の少し強い日差しの下で見学会ははじまった。



図1 和泉川流域図（今回歩いた対象区間）

2. 貯めることも、美しく

三ツ境駅からバスに乗り、宮前橋付近で下車。陸地化した部分と流路が入り混じる和泉川だ。住宅地の中を流れる都市河川でよくみる光景だ。しかし、吉村さん曰く、25年前にここまでの復元計画を立てるのには相当な努力が必要だったという。吉村さんの案内のも

と、下流へ向けて歩き出した。

川の堤防に沿って歩いていくと、堤防が急になくなった。堤防がなくなった先は階段で降りることができ、水辺に近づける。一瞬親水公園かと思ったが、ここは水を貯めこむための遊水地への入口、越流堤である（写真1）。宮沢遊水地は和泉川の出水時に最大で48.650m³水を貯めることができ、約20m³/sのピークカット効果があるという。越流堤は取り外し可能な角落しの構造になっており、万一、河床低下などで越流がうまく起きない場合は板を取り外し、越流が円滑にできるようにしている。

またこの遊水地の機能は治水だけにおさまらない。様々な仕掛けがある。1つは風景。この宮沢遊水地は、地形に沿って台地と台地の谷間を利用して展開しているため、周囲の斜面林が視界を包み込んでおり、都市部ながら美しい緑地帯だ。斜面林と河川空間が連続した構造になっているため、野鳥も多くみられる。また、構造物の越流堤も周囲と調和できるよう、階段の取り付け、護岸との接続部などの処理がデザインとしても美しいつくりになっている。2つ目は人が集う工夫。この場所は遊水地でありながら、普段は池や小川があり、親子のザリガニ釣りやおじさんの魚釣り、犬の散歩など多くの人を訪れる親水公園になっている（写真2）。あんまり気持ちいい場所なので僕らも長居してしまい、遊水地内の広場で昼食。みんなそれぞれ斜面の気に入った場所に座っておにぎりを頬張っていた。そして3つ目は周囲への配慮。この場所は遊水地建設に伴い、土地を掘り下げるため、周囲の地下水位を低下させる恐れがあった。そのため周囲を地上からはみえない連続地中壁で囲み、地下水位を維持する構造にし、目にみえないところまで配慮している。知れば知るほど、よくできているこの計画。実は1987年に計画されたものである。僕が生まれた年の頃にこんな計画が進行されていたかと思うととても誇らしく思えてきた。水を貯めるにも美しくありたいという当時の河川技術者達のメッセージが詰まった遊水地。皆さんも一度行けばそのメッセージがひしひしと伝わってくるはず。



写真1 宮沢遊水地（左）和泉川（右）



写真2 人が集平常時の宮沢遊水地

か必死なようで、5月の水の冷たさなど気にならない様子。これがいわゆる『川ガキ』ってやつだ。最近、全国的に川ガキが減り、絶滅が心配などと言われるが、和泉川にはまだひそかに絶滅危惧種『川ガキ』は残っていた。

川に夢中な川ガキ達をもぐり橋の上から眺めていたら、犬の散歩のおばさんが通りかかった。「本当にこの川は変わりましたよ。私は昔からここに棲んでいるけど、ほんと住みやすくなってね、ああやって子供達がいつも遊んでいるんですよ。」犬とともに橋の上で立ち止まり、川ガキ達をみて目を細めた。川が美しいと川ガキが棲みつく。川ガキがいると地域も元気になる。地域が元気だと川も元気。そんな完成系が関ヶ原の水辺にはあった。



写真3 休日の遊び場は関ヶ原の水辺

3. 関ヶ原の水辺に棲む絶滅危惧種

宮沢遊水地を後にし、再度上流へ。次なる河川再生の場所、関ヶ原の水辺に到着。水際にはヨシやガマが茂り、その斜面からは川に木がせり出してきている。小川の小さな橋の上に、小さなバックと靴が2つずつちょこんと並べておいてあった。誰の荷物だろうかと思っていたら、すぐに答えは見つかった。川の中で金魚網を振っている女の子2人の姿があった（写真3）。さらに上流のほうには少し大きなタモ網を持った男の子らが3人、慣れた手つきで水中に網を入れている。何が取れるか聞いてみたら、ザリガニが多く採れるポイントらしい。知り合いの方で和泉川の瀬谷区付近で育った40代の方がいるが、やはりザリガニを採って遊んでいたらしい。僕も川こそ違おうが、幼少期はまちの中の川でザリガニを採って遊んでいたのを思い出す。やはりどの時代もザリガニ採りにはロマンがあるらしい。本来なら、在来の水生生物がメインのほうの方がベターなのかもしれないが、川の中を堂々と闊歩する赤いギャングの姿は世代を超えて魅力的なようだ。それにしても子ども達は相当真剣だ。相手が川の中を自由に動き回るだけに子どももどうやって追いつめる

4. 河川技術者の豊かな想像力と未来の河川像（東山の水辺）

おばさんや子ども達と別れ、川沿いをさらに上流へ歩く。東山の水辺に到着。東山橋まできたところで吉村さんが足を止めた。「皆さん、このパネルを見て下さい。」そう言って吉村さんが取り出したのは鋼矢板で囲まれた水路のような無機質な川の写真だった（写真4）。「実はこれ、20年前のこの場所なんです。」過去の写真では、川と家との距離がなく、密着した圧迫感のある空間になっていたのが、十分な川幅を確保したことにより現在は開放的な空間に生まれ変わっている（写真5）。

現在と過去の場所がこんなにも劇的に変わった川の写真は初めてみた。これほどまでに川は変わることができるのかと身震いするほどの感動を受けた。「すごいでしょ？この想像力。どぶ川だったこの（過去）の川にあなたはこれだけ（今）の未来を描けますか？」と吉村さんは誇らしげに笑ってみせた。吉村さん達河川技術者の豊かな想像力と必ず変わると信じている心があれば到底この風景は生まれなかつたろう。左岸

の斜面林の連続する地形に合わせた河道処理をし、自然な河川空間が生まれている。また桜並木が河川の空間と住空間を切り離し、プライバシー空間確保の役割を担っており、景観配慮と住空間の快適性の追求に事欠かない。河川技術者の底知れぬ想像力と技術力に感服するばかりだ。

全国に未だたくさんあるどぶ川。あなたならどんな河川の未来像を描きますか？



写真4 施工前の東山の水辺（当日配布資料より）



写真5 現在の東山の水辺

5. 直線化した川にも少しの演出

少し電車で移動して、いずみ中央駅で下車。駅をでてすぐのところに地蔵原の水辺がある（写真6、写真7）。ここは川こそ、直線化された典型的な都市河川であるが、ちょっとした一工夫で人が川に集まる場所になっている。地蔵原の水辺は1994年に建設された水辺公園であり、川と隣接するかたちで水に触れあえるため、親子連れが多く訪れる。

水辺には、生物池と水遊び池の2種類があり、本川に直接入らずに浅い場所で水遊びができるので、小さい子の水辺デビューには絶好の場所になっている。また公園の隅々にも工夫が施されており、半月型の花壇や、階段状の水辺空間などデザイン性が非常に高い。用地確保等で東山の水辺ほど劇的に変わることができ

なくても、少しの工夫と演出で川は魅力的な空間になる。日本の各地の都市河川への特効薬はこれかもしれない。



写真6 和泉川左岸側に併設された地蔵原の水辺



写真7 人が憩う地蔵原の水辺

6. 2人の河川技術者の功績

川を軸としたまちづくりをコンセプトとして1987年に和泉川河川整備基本計画案が提案され、1991年には、建設省（当時）のふるさとの川整備事業にも採択された。今でこそ、『川まちづくり』という考え方が目指す理想形として描かれることが多いが、当時として、そして今でも最先端の川づくりの考え方だ。この計画を推し進めるにあたって活躍したのは河川技術者達であるが、ここではお二方について言及したい（写真8）。

一人は先ほどより文中に登場する吉村伸一さん。横浜市の土木職員として、和泉川改修計画の仕掛け人ともいえる。和泉川のように、川とまちを一体とした川づくりを進める場合、道路、緑地、公園、住宅など川以外にも様々な要素があるため、道路局、緑政局、都市建設局など様々な部局との調整が必要で、縦割りな行政の性質上、当時は容易なことではなかった。それをうまくまとめあげ、計画を推し進めた。河川技術者の役割を越えた広域的な調整を買って出た吉村さん。「い

やあ、当時は必死だったよ。」と笑って過去を振り返る。和泉川改修の功労者の一人なのは間違いない。

そしてもう一人、設計コンサルタント側（受注者）の立場で和泉川改修に尽力された橋本忠美さん。橋本さんは主に空間設計を担当し、和泉川をどういう風にデザインするかを計画するのに、小学生に意見を求めた。対象としたのは小学4年生。友達と遊ぶ活動範囲が少し広がりかつ、塾にも通っている子が少ないこの学年であれば、川に近づく機会も最も多いだろうという予測のもとだ。和泉川流域ワークショップを開催し、どこで遊んでいるか、どの程度水遊びをしているか、川への願いはどんなものかなどの意見をそれぞれ分析し、ニーズをつかんだ。主成分分析の結果、浮かび上がってきたのは、『川の周りに広がる風景イメージ』、『水の流れや岸辺のイメージ』など。現在の多自然川づくりでも大事にされる要素である。子供達は感覚的にいい川を知っており、川の空間デザインに敏感な美的感覚を有していることが分かる。

橋本さんは子供の理想に近づけるべく、構造物一つにもコンセプトを見出し、細かな配慮をしながら施工を統括した。その結果、宮沢遊水地のような周囲に溶け込んだ施工処理をした越流堤、地蔵原のような水遊びと生物遊び両方できる水辺の空間などが完成した。この整備事業は高く評価され、2005年には土木学会デザイン賞において、最優秀賞を受賞している。

行政内部の横断的連携を可能にした吉村さんと確実なニーズを把握し、かたちにした橋本さん。この両者の活躍が現在の表情豊かな和泉川を創り出した。



写真8 和泉川改修に携わった吉村氏(左)と橋本氏(右)

7. 和泉川に乾杯！

地蔵原の水辺を見終わったところで今日の見学が終了した。一通り終了したところで、参加者みんなで打ち上げ。しかし、川系仲間の打ち上げの仕方は少し違

う。みんな好きな飲み物一本買ってきて、地蔵原の水辺に足を浸しながら一杯。水辺で飲むラムネはまた格別だ。水辺で隣に座った山梨県からいらした方や他大学の研究室の人らと仲良くなった。川の行事は川友が増えるからやめられない。40人の参加者ととも、川の未来を描いた河川技術者達と川ガキを育てている和泉川に乾杯！（写真9）



写真9 和泉川に乾杯！

【筆者について】

坂本 貴啓（さかもと たかあき）

1987年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC（青少年博物学会）、大学時代ではJOC（Joint of College）を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢みている。

筑波大学大学院 生命環境科学研究科 環境科学専攻 博士前期課程在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『郊外の湖沼・河川流域における社会変化に伴う流域管理のあり方に関して』と題し、流域の水質・水量の将来予測や河川市民団体の特性について研究中。最近のお気に入りには研究室で飼っているスジエビがエサを摂る姿をみること。

